



(青木村の秋が我々を出迎えました)

10月例会レポート

青麗の10月例会は、第1回青地巡礼・長野県青木村での開催でした。

どこまでも広がるまさに青麗の秋天の下に参集した会員32名（遠くからは鳥取・宮城・三重・愛知からも）で、1日目(10月12日)は田沢温泉・富士屋旅館での句会。

旅先ゆえ、久々にアナログ方式。各自短冊で2句出句。のちにランダムに配られた短冊をそれぞれ清記用紙に書き、番号を振り、その清記用紙を回しながら選句する。紙の回し方、番号の振り方、選句の際には番号を書いて、各自がよいと思った句を控えておく、などの進行手順・注意事項が丁寧に伝えられた。着いて早々の句会であるにもかかわらず、当地をことほぐ佳句が数多く見られた。



高田主宰いわく「吟行句というのはさっと作ってみるということも大切。へんにひねらないのがよかったです。じっくり推敲するのは帰ってからでもできますから」。この青木村に、青麗の仲間と今ここにいるうれしさを噛みしめる。

(句会には会員からの差入お菓子が)



2日目(10月13日)は、大法寺へ。国宝の三重塔、俳人・栗林一石路の句碑や郷土美術館での企画展、昼食にはタチアカネの蕎麦…そして、昨日に引き続いての晴天。見渡せば句材・季語しかないような恵まれた吟行の場である。

ここでは、青木村との共催で「青きふるさと俳句大会」としての句会。午前中、高田主宰の「はじめての俳句教室」に参加された地元・青木村の方々と一緒に、大法寺の本堂で句会が始まる。短冊2句出句のあと、幹事たちで投句一覧を作成し、コピーを配布。その投句一覧から各自選句した。

互選の披講ののち、主宰から☆1つ、☆2つ、☆3つの句の発表、講評。

青木村をぜひ句にしてほしいと事前に言っていた幹事の要望は申し分なく叶えられたのではないかと思う。青木村・大法寺の景や心が見事にあらわれた句が次々と。

青木村で川柳をされている方、大法寺の副住職、中日新聞の諏訪記者も人生初投句、視点の新しい、嬉しいコメントをいただいた。

そして、この日、特選☆3つの句を詠んだ5名には、高田主宰から主宰の句が直筆で書かれた短冊が贈られた。心からの拍手が本堂に響いた。

「よい句が本当に多くて、でも短冊は5枚しか用意していないので選句がつかった」と高田主宰は笑顔で言う。

選句のなかに「信濃」の枕詞を使った一句があった。作者はこの地に来るからぜひ使いたいと思っていたのだという。「言葉を用いて俳句を作っている私たちに、こういう気持ち、こころがまえはとても大切なこと」と高田主宰。

現地に足を運んでこそその実りある例会であり、記念すべき青地巡礼の第一歩であった。



(文責：岡崎弥保)

(写真：後藤憲子)